直接インタビューをした70人の証言とアンケート調査の自由記載の内容を、7つのカテゴリー（(1)地震発生直後の状況、(2)原子力発電所事故後の状況、(3)将来への不安、(4)情報収集の状況、(5)震災を経験して、(6)今後、行政に期待すること、(7)支援活動）に整理してまとめている。大震災と原子力災害に遭遇した外国出身県民の生々しい声が聞こえてくる貴重なドキュメントである。

1 証言の概要

外国出身住民には、日本で生活するうえで突き当たる「3つの壁」（「言葉の壁」「制度の壁」「心の壁」）があると言われている。災害時には、この「壁」がより高くなり、いわゆる災害弱者になるリスクが高いと言われているが、このことが現実の問題となったことが証言からうかがえる。

特に日本語がわからないことからくる「言葉の壁」の影響は深刻であり、ライフラインが途絶しても近所の人から役に立つ情報を得られなかったり、避難指示や津波警報がわからなかったり、状況の把握ができないことで極度の不安の中に置かれたり、避難所でのトラブルに際し日本語で言い返せなかったことが心の傷になったりした人がいたが、幸いにも今回の調査対象者の中では少数であり、家族や同僚、近所の人のサポートで大事には至っていなかったようだ。有事の際には、日本語ができることが非常に重要であるとの認識から、震災後本格的に日本語の勉強を始めた人もいる。また、子どもが母語を話せないことで、母国への避難を断念したケースや母国へ避難してもすぐ帰国したケースも見られている。

「心の壁」では、具体的に差別を受けたという証言はなかったが、過去に起きた関東大震災の時の事件を思い出し、風評による迫害がまた起きるのではないかと緊張したという人がいた他、避難所へ受け入れてもらえるのかどうか半信半疑だった人、東京電力の補償の待遇が違うとの噂が流れて動揺した人がいた。また、途上国からの援助を日本人に快く受け取ってもらえるか心配だったという証言があった。結果的に快く受け取ってもらえたが、日本人の優しさをその理由にしている。災害に際して、日本人は親切で親身に対応してくれたとの趣旨の証言が多く得られている。

なお、「制度の壁」では、外国人登録の制度上の問題で東京電力の補償申請書類が日本人より遅く届いたという証言があった程度であった。

日本と外国との情報の違いについては、多くの証言があった。国際電話やメールなどにより、母国のメディアが流した大量の情報が提供された他、自らもインターネットにより外国のサイトからの情報を収集したが、それぞれの情報が違い過ぎて何が正しい情報かわからなかったという人が多かった。多くの人が、日本政府が情報を隠蔽しているのではないかという疑いを持っており、情報量も日本は少ないと感じ、母国から情報を得て行動の指針としようとした。

平成23年3月15日に中華民国政府から出された被災地域からの退避勧告を皮切りに各国から続々と退避勧告が出されたが、それに伴い、多くの人が母国への避難を実行した。証言では、避難した人、避難をせずに踏み止まった人それぞれの思いが語られているが、国による対応の違い、経済力による違いがあったことがわかる。また、避難した人は、母国の親族が歓迎してくれたものの、残してきた家族への罪悪感等から、反対を振り切って比較的短期間で戻ってきた例

が多いことがわかる。

今回の大震災において、外国出身住民は、災害弱者という側面だけではなく、地域の一員として支援者となった。証言でも、海外からの支援金や支援物資を避難所に送り、自らは炊き出しを行ったことや、母国へ避難した後、募金活動をしたことが語られている。被災地支援のボランティア活動については、積極的に行おうとしたが情報が少なかったため十分に活動できなかったようだ。

最後に、震災時の日本人への評価については、自分のことだけを考えるのではなく、一緒に頑張ろうという雰囲気があったことや、我慢強く政府の言うことに従順で一緒に行動すること、非常に冷静であったこと、助け合いの精神があったこと等が語られているが、一方、政府に対してメッセージを出していかないと政府が変わらない、日本人は変わった方がよいとの証言もあった。

2 証言

出身国の表示は、個人情報に配慮し以下の通りとした。

東アジア……中華人民共和国、中華民国、大韓民国、モンゴル、在日韓国人、在日朝鮮人

欧米……イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド

東南アジア…フィリピン、タイ王国、ベトナム、インドネシア、カンボジア、パキスタン、インド、スリランカ

(1)地震発生直後の状況

最初は事の重大さに気づかなかった。帰宅途中の風景を見て、一人で夜を過ごすことに不安を覚えたが、電話が通じなかったので、どうしていいかわからず、11日は一人で自宅に帰り一晩過ごした。とても心配だったが、携帯電話が通じなかったので、誰とも連絡が取れず、動きようがなかった。地震の被害状況、津波の大きさなど、よくわからなかった。わかっていたら、当日一人で家に帰るという選択はしなかった。翌日から職場の同僚の好意に甘えて、一緒に過ごさせてもらった。

（避難対象地域女性　欧米）

震災時は東京に出張中だった。事務所の人、義理の母に電話をしたが通じなかった。会社と会社の社員の状況を知りたかった。確かめに戻ろうとしたが、戻れないということが信じられなかった。3月12日の午後、会社の人から電話でみんなの無事を知らされた。町が役場ごと避難したことはテレビや会社と友達からの電話で知った。

（避難対象地域女性　東アジア）

市内のショッピングセンターの2階で夫と一緒に買い物中だった。夫と一緒に自分たちの判断で外に逃げた。店の人の誘導はなかった。自宅に一人いる義母の安否が心配だった。津波で家が流されるのではないかとも心配した。夫は、家は高台にあるから大丈夫だと言った。通常は1時間で帰れる自宅に、2時間半かけて帰った。夜の10時に津波警報が出て、近くの公民館（避難所）に家族3人で避難した。寒かった。朝の4時に家に帰った。

（避難対象地域女性　東アジア）